

宇野浩二の批評性

——大正時代中期の言説状況と「蔵の中」——

谷 彰

大正時代も中期を迎える五年から六年にかけて、大正教養主義、取り分け人格主義的な言説が文壇内に浸透することにより、理想を追求する〈生活態度〉が作家の〈人格〉に反映し、成熟した〈人格〉が〈偉大な作品〉を生むという思考法が規範化して行く様が、近年、山本芳明や大野亮司らによつて明らかにされている。¹⁾それは作家評価にも劇的な変化をもたらし、志賀直哉が理想的な作家として賞揚される一方で、正宗白鳥や近松秋江などには、その作品から窺える〈生活態度〉や〈人格〉の不真面目さゆえ、大変な批判が浴びせかけられるようになるのである。

こうした言説状況の中で、個々の作家がどのように対処していったかを検証していくことは、大正文学を新たな視角から読み直す契機となり得るだろう。本稿では宇野浩二の「蔵の中」を取り上げ、大正時代中期の言説状況と対置させることにより、この問題について考えてみたい。

「蔵の中」は今日でこそ、〈宇野浩二〉といえば「蔵の中」といわれるほどの出世作である²⁾との高い評価を得ているが、後述するように、発表当時はむしろこの作品への反発を口にする評家の方が多く目に付くほどであった。この事實は、「蔵の中」が当時の読者の読みの規範を逆なでする、何らかの批評性を持っていたことを意味するのではないだろうか。「蔵の中」が広津和郎から聞いた近松秋江のエピソードを元に書かれたことは有名な話だが、これと相前後して書かれた評論文「近松秋江論」に、大正時代中期の言説状況に対する宇野の批評意識が窺えることから、宇野に「蔵の中」を書かせたモチーフの一つとして、当時の言説状況に対する宇野の批評性が指摘できるのではないかと思われる。

本稿のねらいは、こうした宇野の批評性を「蔵の中」から導き出すことにある。「蔵の中」における語り手と聞き手の関係に着目することにより、当時の言説状況に向けられた宇野浩二の試みを明ら

かにしたい。

一、大正時代中期の言説状況

ではまず、先行研究の成果を踏まえつつ、大正時代中期の言説状況を概観することから始めたい。

大正五年八月に赤木桁平が表した「遊蕩文学」の撲滅¹という過激な内容の論説文によって、所謂「遊蕩文学撲滅論争」が起つたことは周知の事実だが、赤木は「自己をより若くし、より完きものにしよ」とする努力のもとにのみ、真当の意味の芸術が生まれてくる²との信念に基づき、そうした「人生に対する真摯なる考察」や「誠実なる態度」へ「素樸なる感激」を著しく欠き、倫理的意識³の上で大いに問題のあるとする長田幹彦・吉井勇・久保田万太郎・後藤末雄・近松秋江らの名を挙げて、これに「遊蕩文学」のレッテルを貼り激しい批判を加えた。特に後述する近松秋江などは、赤木によつて「低劣なる乞食文学」とまで酷評されている。こうした赤木のセンセーショナルな論難ぶりに対して、小山内薫を初めとする数名が赤木の論の粗雑さを指摘した反論を投げかけ、さらにそれに対して赤木が再反論する形で論争は展開したが、芥川龍之介が「あの議論はピントが少しはづれてゐる」と指摘したように、論争は深められることなく終わった。

しかし、この論争を機に「遊蕩文学」が流行した文壇の現状を反

省する気運が高まったのもまた事実である。たとえば、雑誌「文章世界」の「読者論壇」には、

赤木桁平氏が遊蕩文学撲滅の旗幟を一度翻へしたのを切掛として此問題が文壇の人々から旺んに論議せられた。吉井勇氏近松秋江氏長田幹彦氏等のヨタ連は真先に槍玉に挙げられた。これも矢張り同じ嫌疑を蒙つた小山内薫氏杯も諸氏の攻撃批難に対して反駁論を書いたさうだが何でも表現の方法が拙かつたとか論理が妥当でなかつたとかで同じグループの間にさへ散々な不評をうけたさうな。(中略) 現今の如く翻訳文学にも倦き真摯な創作にも余り興味を感じなくなつて一般読書階級の主要潮流が滔々として淫靡な野鄙な低級な方向にのみ向つて流れてゐるこの恐怖に備すべき文壇の過渡期、頽廢期に際会して例令幾人でも真面目に覚醒し自覚して吾人の進むべき正当な道程を指し示して呉れるといふことは感謝すべきことだらうと思ふ

という読者からの声が掲載されている。「遊蕩文学撲滅論争」が展開された直後から、この欄にも論争に言及した読者の感想が掲載され始め、中には長田幹彦や近松秋江の愛読者が赤木によつて罵倒された作家達を擁護し、返す刀で赤木への嫌悪を語つたものも散見できるが、右のように赤木の主張に賛意を示す生真面目な読者が、大勢としては多く目に付くようになるのである。

続いて大正五年十二月九日の漱石の死に伴い、漱石の門下生達を

中心に追悼文が書かれることになるが、その多くは「先生の作品を愛敬するの念は、漸次先生の人格を愛敬するの念となつた」、^①「現実には於ける先生と、私の空想の裡に描き出されてゐる先生の影とが、痛快なほど同じ方向にのみ動いて行つたからである」と語る赤木桁平の追悼文^②に代表されるように、漱石を偉大な人格の持ち主と見なし、それを自己の理想像として祭り上げて行くという共通項を持つてゐる。漱石はその死を契機に、人格主義の偶像として大正期の言説空間に配置されて行くのである。

この流れの延長線上の大正六年上半期に、和辻哲郎を軸として白樺派の評価を巡る二、三の論争が起こる。その第一は鳥村抱月との間に交わされたもので、自然主義の指導者・抱月が白樺派の提唱する新しい機運を、自然主義の戦いに疲れた者が社会に対して妥協的な道徳的観念を掲げて現れたもので期待できるほどのものではないと批判したの^③に対して、和辻は、まず自然主義と白樺派の断絶を強調した上で、抱月たち旧時代の人が新時代の人を理解できないのは、根本的な「生活態度」が違ふからだと応酬した。和辻によれば、新時代の文学者の「生活態度」とは、「自己の「あるがまゝ」に満足し得ないで、「あらねばならぬ」或物を痛切に心臓に感じてゐる」^④高邁な理想を追い求めるもの、ということになる。和辻はここで、「理想を目指し」「自己」を高め豊かにしていくという「生活態度」が文学者の「人格」に反映され、「人格」の成熟は「偉大な

作品」を生む^⑤という、新時代における作家と作品との相関関係を提唱したのである。

この和辻の全面的な白樺派擁護に対して森田草平や江口渙が投げかけた疑問に、和辻が反駁したので論争の第二ラウンドである。白樺派の人道主義が「単に人道主義の概念にとどまるとすれば、如何にその声は大きくとも、畢竟空なる叫びにすぎない」のではないかと、江口の問題提起に対して、和辻は「私はこゝに作家及び批評家として、志賀直哉、阿部次郎といふ二つの名を点出することによつて、あなたの議論を粉碎し得ると信じてゐると、この二つの固有名を挙げることにより、新時代の文学者の実力を「現実に肉薄する」に足るものとして評価する。

さらに、武者小路実篤の「青年の夢」に寄せた和辻の感激に対して、彼の涙は何と安つばい涙だらうと岩野泡鳴が投げかけた嘲笑に、腹を立てた和辻が応酬した第三ラウンド^⑥がこれに続くが、その応酬の紹介は割愛する。こうした和辻の徹底的な自然主義批判と白樺派擁護が、停滞した文壇に新時代の息吹を吹き込むという、前年からの一連の流れの中から生じていることが理解されるであろう。そして大正六年十月に志賀直哉の「和解」が発表され、南部修太郎や江口渙^⑦に代表される「和解」評、志賀直哉評が現れることにより、山本芳明が指摘する「文壇のパラタイム・チェンジ」は確立する。

白鳥とは違って、志賀の場合は「和解」という作品の素晴ら

しさが志賀直哉の「真実に生きる」へ生活態度の証明になり、同時に志賀の「真実に生きる」へ生活態度が「和解」という作品の素晴らしさを支えているという好循環が生じているのである。志賀直哉は「和解」という作品の好評によって、へ作品へ人格へ生活への理想的な関係を構築した生きる実例となつて、文壇に於いて君臨することになったのだ。²⁰⁾

ここで山本は、人格主義的言説のパラダイム化により文壇内に君臨していった志賀直哉と対比させる形で、正宗白鳥を引き合いに出している。志賀が「小説の神様」として祭り上げられる一方で、大正五―六年を境に、赤木から「遊蕩文学」のレッテルを貼られた長田幹彦や近松秋江たち、そしてその秋江から女性を奪った経緯を作品化した白鳥などは、その不真面目な生活態度ゆえ、作品も不当に低い評価に晒されて行くのである。²¹⁾

以上、大正五―六年の文壇の動向を簡単に確認してきた。こうした整理の仕方に遺漏が多いのは承知の上だが、「蔵の中」が書かれる直前の時代の言説状況が如何なるものであったか、右の素描によってある程度明らかになったと思う。

二、「蔵の中」の同時代評

「蔵の中」が発表されたのは大正八年四月、「文章世界」誌上においてだが、後に宇野はこの作品が世に出た当時のことを回想

して、へ「蔵の中」のやうな書き方は、文字どほり善かれ悪しかれ、私の知らず識らずの創案と云へば已惚であらうか。しかし、或ひは、そのためか、当時、この作品に対する批評は毀誉褒貶半半であつた。と語っている。宇野は「蔵の中」の物語叙法が自己の創案であることと、「蔵の中」に対して賛否両論が寄せられたことを指摘しているが、前者については後述することにして、後者に関してその内実はどうだったか、主だった同時代評を見てみたい。

「蔵の中」を最も早く評した一人に広津和郎が挙げられる。広津はへ私自身の気持から云ふと「蔵の中」と云ふ作の内容、及びそれを書いてゐる作者の態度、心持は、自分に近いものではないと思ふ。かなり縁遠くさへもある。それにも拘らず「蔵の中」に溢れてゐる宇野君の才気はかなり私を驚嘆させた。うまいものだと思つた。人生には、なる程、かう云ふ生活もあるかと思はせた。いろいろな事を考へさせずには置かなかつた。(傍点原文、以下同)と、自分と宇野との文学的資質の違いを指摘しつつも、宇野の「才気」を認める評価を下している。新潮社の佐藤義亮から聞いた近松秋江のエピソードを宇野に提供することでこの作品の成立に一役買ひ、また文壇的には未だ無名の宇野を世に喧伝しようとした、親友ならではの好意的な評価である。しかし、広津がへ或読者には此作はつまらないかも知れないと危惧したように、宇野について知るところの

ない大半の同時代読者には、「蔵の中」は決して好意的には迎えられなかった。

たとえば菊池寛は、⁽²⁾「文章世界の宇野浩二氏の（蔵の中）」は、一種風変りな小説である。が、此の題材を扱ふのに、何うして落語か何かのやうな形式を取らなければならないのか、もう少し真面目な筆致で書いても充分ユーモアは、出ると思ふ。主人公の告白と云ふ形式を取りながら、作者が主人公を滑稽化しようとする所に、変な撞着が生ずるのではないかと思ふ。と、この作品の「形式」（「文体や語り口」）に真面目さの欠如を認め、この点に対する引っかかりを表明している。それでも菊池は、へ千遍一律に、妙に堅くるしいゆとりのない現代の作風の中に、かうした無駄話的な小説も、変つて居て面白いと思ふと、曲がりなりにも「蔵の中」の存在意義を認めているが、これが、

宇野浩二氏「蔵の中」（文章世界）此作の中の説話者が屢々断つて居るやうに、実際非常に読みづらい書き方である。余り必要でもないことをうんと沢山書きこんで、読者をはぐらかしたり欠伸をさせたりして、それを傍から見て楽しもうとして居るやうな人の悪さが見える。作の最後に「おや、もう一人もなくなりましたね」と書き加へて居るところなど、その作者の心持を付度して見て、私はむしろ不快に近い心持になった。拙くても可いから、もつとまともに莫迦正直にぶつかつて貰へ

ば、この作などももつと見応へのする作になつたかと思ふが、これでは折角の題材に、何等の厚みも附いて居ないので惜しい気がする。⁽³⁾

と述べる田中純や、さらに、へ作品としては、全体が異常なエピソードの連続だけで何等内容を一貫する統整力がない。表現もあまりに煩雑だ。それに人前で好いことのやうに自己を嘲弄するやうな、そしてそれが同時にこの作者の態度であるやうな行き方は、私は取らない。⁽⁴⁾という細田源吉の「蔵の中」評に至ると、ほぼ全否定の趣を呈している。

要するに、菊池も含めて多くの同時代読者は、この作品の語り手（ひいては作者・宇野浩二）の「不真面目な態度」に置きや反感を覚えているのであつて、このことから「蔵の中」が発表当時、人格主義的コードに抵触する形で読まれてしまったことが窺えるのである。

その一方で、友人の広津を除いて、例外的に「蔵の中」を評価した人物に正宗白鳥が挙げられる。白鳥は、

宇野浩二氏の作品は、これまで一度も読んだことがなかつたが、「蔵の中」はい、ものであつたと思ふ。文章は蕪雑で少し歯切れが悪いやうであつたが、病的人物の心理はそれに伴ふ事件と、もになか／＼よく描かれてあつた。落語のやうな軽い調子を用ひたところもあつても、それが悪洒落にはなつてゐな

つた。むしろ氏の才気を見る事が出来た。谷崎潤一郎氏も屢、かういふ病的人物を取扱つてゐるが、谷崎氏のは絢爛な文章によつて読者を眩ますばかりで、病的心理について格別深い洞察のないことが多い。宇野氏のは作者にかういふ経験や実感があるのではないかと思はれるほどに縦横に描きつくされてゐた。空想も描写も紛々たる凡庸作家中に異彩を放つてゐると、私は読んだ當時に思つたのであつたが、その後の文壇に氏に対する評判がちつともあらはれないのを見ると、私の批判力は当にならないやうだ。²⁷⁾

と、「病的人物」を取り扱ふ宇野の「才気」を認め、この作品に対する文壇の評価の低さを訝しがっている。この白鳥の後押しに意を強くした宇野は後日、へ僕の「蔵の中」を、その発表の当時黙殺しておいて、或ひはよく分らないでそのまゝに見逃しておいて、その後それに対して正宗白鳥の声が、りがあり、さて又世間的に少々評判のよかつた「苦の世界」が出ると、「蔵の中」の方がよかつたなどといふやうな、無定見な、人の顔色を見てからでなければ物が言へないやうな批評家は(中略)悪魔にでも食はれてしまふがよい」と気炎をあげているが、忘れてならないのは、当時白鳥は文壇内で不当に低い評価に晒されていたという事実である。

このように発表当時「蔵の中」に寄せられた批評は、宇野自身かへ毀譽褒貶半半」と回想した以上に厳しいものであつて、この作品

と時代の言説状況との間の緊張した関係が推し量られる。

三、「近松秋江論」に見る宇野の批評意識

ここで問題になるのは、「蔵の中」に寄せられたこのような批評が宇野浩二にとつて予想し得るものであつたか否かということ、言い換えれば、へ人格主義」を主たるコードとしてこの作品を読んでしまふ当時の言説状況に対して、宇野が批評意識を持ち得たのかどうかということのだが、この点を確認するために、宇野浩二が大正八年九月に、やはり「文章世界」に発表した「近松秋江論」を見てみたい。このエッセイは、同年十二月に聚英閣から刊行された「蔵の中」において、「(序にかへて)」という副題を付されて巻頭に収録されたものである。

「近松秋江論」の導入部は、筆者が友人と神楽坂の寄席に行き、そこで垣間見た無名の落語家の、噺が下手なため客にろくろく聞いてもらえないとか、話し中に落雷により場内が停電してしまふとか、さらに後続の者が遅れたため唄を歌つてまで無理矢理話し続けなければならぬとかの、芸人としての辛さを物語るエピソードから語り始められる。その落語家が退場した後、宇野は白樺派を引き合ひに出し、へ苦勞の経験のない人や、さういふ人の小説よりも、その反対の人や、さういふ人の小説の方が、どうも一段面白い」という小説観を示し、へ一部の白樺諸君の小説」は、へ人間の色んな

苦勞を材料にすることが出来ないから、書物や空想の方から考へ出しよ、人道主義なぞといふ主張を材料にした、即ち小説本来の目的から言ふと、第二義的なものが多いやうに思へて仕方がない」と、白樺派の（人道主義）的小説を批判する。「苦勞知らず」という観点からの白樺派批判は、当時の一般的な批評言辭で、特に目新しいものではないが、作家自身を磨く実体験上の苦勞を小説の第一義に置く宇野が、（人道主義）という標語を小説本来の目的から言うとして宇野は、文壇内に於いて近年誰よりも苦勞した作家として近松秋江を思い浮かべ、以下に秋江論を展開して行く。

宇野の秋江を論じる口調は、揶揄的な調子を相当含んでおり、駆け出しの作家が自分より十五歳も年長の中堅作家に対するものとは思われなところがある。おそらく宇野の意図は、秋江とその文学を積極的に評価することよりも、彼を貶めていた「世間」を批判することの方にあった。その意味で、いわばだしに使われた秋江が、（あの秋江論は甚だしく態度が軽佻である）と不快感を表明したのは、当然の反応だと言えよう。

では、宇野の批判の矛先は具体的に「世間」のどこに向けられていたのか。

彼は、読者の多いといふことが通俗作家といふ証拠にならない、と紅葉のために弁じてゐるが、さうかも知れないが、彼の

作が紅葉よりも読者の少ない理由として、僕思ふに、彼の作が往々小説の域を越えさうになる程、主観的に過ぎるといふ嫌ひがあるのも確にその一には違ひないが、今一つの重大なる原因は、やはり紅葉のそれよりも彼のその方が狭く且深く行つた。け、つまり非通俗的だからではあるまいか？更に僕思ふのに、彼の作はその非通俗で成功し、通俗的なものに於いて失敗してゐる傾がありはしないか？同じ流と言はれた、当年の赤木桁平の所謂遊蕩文学者等の中にあつて、外の人々が皆桁平の棒で打たれた代りに、相当の錢では報いられた風があるに反して、彼だけは本当に「踏まれたり蹴られたり」で、一人気の毒な目に遭つたのは、それは十把一からげ、文学なぞの細かい所の殆ど分らないらしいあの批評家の目違ひで、彼がやつぱし非通俗の作家である所以だと僕は思ふのである。

右で宇野は、秋江が推奨した尾崎紅葉よりも秋江本人の小説の方が非通俗的であるとし、通俗作家へと転身して行つた長田幹彦など、他の遊蕩文学者と十把一絡げに秋江を論じた赤木桁平の、その差異を読みとれない批評言説を批判している。

また宇野は、秋江の（ものに溺れる）性癖、取り分けへ女に溺れる）性癖を、ドストエフスキーにおけるてんかん病と同様、彼の芸術に面白みを加えるものと論じた後で、

けれども亦、ひるがへつて考へて見ると、天が下七千万の民

草の中には、此頃は殊に大勢は非秋江的で、或ひは民本主義に熱中してゐる者もあり、上品主義を信奉してゐる者もあり、実は誰も彼も腹の底のどこか一箇所位では秋江の心を心としてゐるのだが、そこはどうも万能の神様が造つた不思議な人間といふもので、嘗てそのやうなことがあつたか、未来にそんなことがあらうかにしても、現在そこを悩んでゐなければ、悲しい哉、彼の種類の小説を一笑に附してしまひたがる者である。

と、秋江的な性癖は万人に認められるものであるにも関わらず、
〔民本主義〕や〔上品主義〕など、〔主義〕を標榜する大正の言説に囚われてゐる多くの読者に理解されない現状を嘆いてゐる。

このように「近松秋江論」を読むと、宇野が白樺派の〔人道主義〕に対して一定のスタンスを取り、赤木桁平の、差異に鈍感な異物排除的な批評言説に異を唱え、また〔主義〕という標語に囚われる余り人間を表面的にしか把握できない一般読者を揶揄してゐることが窺える。

蓮實重彦は「大正の一言説」の特質として、へある種の記号のときならぬ頻度での流通ぶりを「主題」にする点や、へ差異を識別する感性の極端な希薄さなどを挙げ、こうした言説から真の批評は生まれないことを指摘してゐるが、大正時代中期の言説状況に向けられた宇野の眼差しには、蓮實ほど分析的でないにせよ、これと同種の批評性が含まれてゐると言つてよい。そしておそらく、こ

の批評意識が宇野に「蔵の中」を書かせたモチーフの一つになつたのだろう。

四、「蔵の中」における宇野浩二の批評性

(一)〔私〕の物語行為

では、そのような宇野の批評性はどのような形で「蔵の中」に表されてゐるのだろうか。以下「蔵の中」を読み解くことによつて、その点を確認して行きたい。

「蔵の中」を読むに当たつてまず注目したいのは、この作品の〔語り〕についてである。第二節で取り上げた自作解説の中で、宇野が「蔵の中」のやうな書き方は、文字どほり善かれ悪しかれ、私の知らず識らずの創案と云へば己惚であらうか」と自讃してゐた通り、同時代評の多くは、この作品の〔語り〕に才気を認めるか、或いは蹟き・反感を覚えるかしてゐた。水上勉が「この饒舌体が高見順氏の初期にうけつがれて、「故旧忘れ得べき」となったことも有名な話」だと言つるように、昭和十年代に一部の作家の間で流行した「饒舌体」の元祖と目される「蔵の中」の語りは、何が語られてゐるかということ以上に、如何に語られてゐるか、という点に読者の注意を引きつけてしまふ特性を持つてゐる。

そこでまず〔私〕なる語り手がどのような物語叙述の方法を採つてゐるのか、その物語行為の様相が窺える表現を以下に数点掲げてみる。

① そして私が質屋に行かうと思ひ立つたのは——話が前後して、たびたび枝路にはひるのを許していただきたい。どうぞ、私の取り止めのない話を、皆さんの頭で程よく調節して、聞きわけして下さい。たのみます。

② そして私が今また質屋に行かうと思ひ立つたのは——それがその虫干から思ひついたといふのは、——話がまた前後します、枝路にはひります、といふよりは、突拍子もないところへ飛びます、どうぞ、自由に、取捨して、按排して、お聞き下さい。くはしくいふと、また少しうるさいかもしれませんが、辛抱して聞いて下さい、

④ こんな風にいふと、いかにも誇張した物の云ひ方をするやうですが、私はそれを見た時、(中略)私の愛する著物どもがかくまで優待されてゐるかと思つて、ちやうど親たちが、養子にやつた息子、嫁にやつた娘が、それぞれ行先で豊かに暮らしてゐるのを見た時に覚えるにちがひない、それに似た満足を私は感じました。

⑤ 久しぶりで質屋に好きな著物を見ようとして来て見ると、そこに出入りの美人が帰つて来てゐる、——すこし話があつらへ向きに出来すぎてゐて、安つばくて、妙に私自身も気がとがめますが、万事このとほり、これがありのままなんですから、辛抱してお聞き下さい、たのみます。

(傍線は引用者による。以下同。)

作品冒頭近くの①には、へ私への物語行為がへ話が前後して、たびたび枝路にはひるへ取り止めのないへものであると言及がある。これに類するフレーズは作中で頻繁に繰り返されるのだが、このへ語りへが逸脱的で話が直線的に進まないことがまず最初に示されている。②でも同様のことが述べられているが、話が枝路に入るというより、へ突拍子もないところへ飛ぶと、文脈の流れを無視するかのような、この語りの非論理的な側面が強調されている。そして③では、へくはしくいふと、また少しうるさいかもしれませんがと、この語りの些末主義的でくだかしい側面、つまり簡潔ではない側面が指摘され、さらに④のへこんな風にいふと、いかにも誇張した物の云ひ方をするやうですがや、⑤の語り手自身の気がとがめるほど、へすこし話があつらへ向きにできすぎてゐて、安つばくて等の箇所では、この語りの誇張的、作爲的な側面、言い換えれば、リアリステイックでない側面が指摘されているのである。

こうした語り手の、自らの物語行為に対する自己言及的な発言から浮かび上がるのは、直線的ではない、論理的ではない、簡潔ではない、リアリステイックではないという、このへ語りへの否定的な側面ばかりである。つまり、この語り手は何かに対して、意図的に否定的な姿勢を取つて語つていると言えるのだが、それが何に対してであるかを問う前に、語り手が自らをどのように自己規定してい

るか、その点を先に確認したい。

⑥ こんな風に話に物体をつけると、後の話がたいへん面白さうですが、もとより初めに断つてあるとほり、女のよくやる愚痴話を、男の面をかぶつた女のやうな私がするだけのことで、だらしない取り止めのない話ですから、そのつもりで聞いて下さい、たのみます。

右は作品のほぼ半ばあたりにある一節からの引用である。一見無軌道な物語叙述の方法が採られているかに見える「蔵の中」は、岡本卓治が指摘するように、実は冒頭のへそして私は質屋に行かうと思ひ立ちました」という一文を、作中で五回リフレインすることによつて、巧みに構成された作品だと言える。このフレーズを反復しながらも、語り手はこの小説の本筋（つまり、主人公が質屋に自分の著作の虫干しに行き、そこでヒステリーのため離縁された質屋の主人の妹と出会う、というメインストーリー）になかなか踏み込んで行かず、へ私への過去や日常生活に関する話ばかりを止めどもなく語るといふ形で作品前半部は進行して行く。その前半部が終わり、いよいよこの小説の本筋を語る後半部へと移行する、そのつなぎの部分に当たるのが右に引用した箇所のだが、ここで語り手が作品前半部のへ語りを女性の愚痴話同然のものとして総括している点に特に注目したい。

これは主人公が、作品前半部で語られている通り、四十を過ぎた

ばかりで男性としての能力をへすつかり消耗し切つてしまつた人物であり、また大事にしていた著作をすべて質に入れてしまつてへ机の上につぶして男泣きに泣くような、女性的な一面を持つ人物であるという物語内容を踏まえてのものであることは疑いを容れない。しかし、物語内容の次元とは別に、この作品の女性化されたへ語りには、極めて戦略的なものが認めらる。

⑦ 私は、好きですが、愛するとはいへないと先きにも申しましたとほり、心の中ではずいぶん軽蔑しきつてゐます。私のやうな者が、こんな哲学者めいた、生意気なことをいふとて、どうぞ笑はないでください。だけど、この事だけは、私は、できるならば、世界の女人にかはつて弁じたいと思ひます。

へ女は、好きだがへ心の中ではずいぶん軽蔑しきつてゐるといふへ私へは、へ世界の女人にかはつて著作物を愛する気持ちで弁じたいと願つているにも関わらず、フェミニズム的な意味での女性の代弁者たり得ない。むしろ語り手の真意は、ジェンター格差において、一段低いものと見なしている女性性をあえて身にまとうことによつて、自らの男性性を滑稽化することにあると言つていい。その男性性とは即ち、先に述べた、直線的なもの、論理的なもの、簡潔なもの、リアリティックなもの別称である。「蔵の中」のへ語りへは、当時の一般的な意味での男性的なへ語りを異化する、非男性的な物語行為であつたがゆえに、同時代の多くの読者に違和感

を与えたのである。

(二) 作品内の聞き手の存在

この作品の（語り）が以上のような性格を持つものであるなら、それに向き合う聞き手とは、どのような存在なのか、次にその点について検討してみたい。勿論、その聞き手がこれまで見てきたように、直線的でなく、論理的でなく、簡潔でなく、リアリストティックでもない、女性の愚痴話のような話を、我慢しながら聞かされる存在であることは言うまでもない。直線的・論理的・簡潔・リアリストティックであることを志向する、明治末年から大正初年にかけて成立した近代口語文体を自己規範化しているであろう聞き手に対して、語り手はしきりに「辛抱してお聞き下さい、たのみます」と頭を下げるのである。しかし、ただ近代口語文体を内面化した存在とただだけでは、いささか漠然とし過ぎてゐる。

この作品の聞き手像は、次に挙げる三つの用例から、さらに焦点化されるだろう。

- ⑧ それから、宵のうちには、何と馬鹿馬鹿しい話ですが、辛抱して聞いて下さい、たいてい程ちかい芸者町に散歩に出かけることになつてゐます。あの、待合や芸者屋のならんでゐる、彼等の専用の通路ですな、「なににな新路」といつたやうな小路といふ小路を、私は片端から一応あるいて来るのが例になつ

てゐます。

- ⑨ 話がますます混乱しますが、たいていお察しのとほり、私は、普通の人が名譽とか金銭とかのためにその全力をつくして働く壮年時代を、正直に申しますが、絶え間なく女とのいきさつに費やしてしまひました。又、こんな風な話をする、たいへん不真面目に聞こえるかもしれませんが、私の書きました小説といふのは、その副産物のやうなもので、その大部分はその時その時の泣き事か稀には嬉しさをつつみ切れなく打ち明けた報告かなのです。

- ⑩ まづ、外の下宿屋は、たいてい一つの庭をかこんで、ちやうど女郎屋の或る種の造りと同じやうに、いやしい例を取つてすみません、蹄鉄形に部屋がならんでゐるものですが、この下宿屋はその半分の鉤の手形だけしか部屋がないことです。

- ⑪ は夜になると芸者町を徘徊し、その界限の女性を仔細に見物するという主人公の日常が語られた場面、⑫ は壮年時代を絶え間なく女との経緯に費やして来たという主人公の過去が語られた場面、そして⑬ は主人公の現在住んでゐる下宿屋が女郎屋と同じような造りになつてゐることを説明した場面で、いずれも赤木桁平が言う所の「人間の遊蕩生活に纏絡する事実と感情に重きを置いて」へ好んで「荒色耽酒の感潮境を描出せんと」したものに他ならない。語り手は、この作品を遊蕩文学として見下すであろう聞き手に対して、様々な

弁解を加えながら語っている。

つまりこの「語り」は、遊蕩文学と見れば排除したがるような、人格主義を規範化した聞き手と向き合っているものであり、その意味で大正時代中期の言説状況を多分に意識したものとなっている。これを逆に聞き手の立場から言えば、この「語り」を聞かされ続けることは、自らの「良識」を絶えず挑発し続けられることを意味するのである。

(三) 語り手と聞き手の関係の推移

次に問題となるのが、こうした語り手と聞き手との関係についてである。それは作品の中でどのように推移して行っているのだろうか。

⑪ だんだんと話して行くうちに成程とおわかりになりませうが、私は昔から友だちには借りた金を返さなかつた方が多く、下宿屋はこれまで多少とも借金を残さないで移つたことはなく、この年になつて、(私は孔子の所謂「四十不惑」といふ年を越してゐるのです)、何の信用をも人から持たれない男です。今かりに私が実印を捺しましたところが、おそらく十円の金も貸してくれる者はありませんまい。どこの本屋や雑誌社や新聞社でも、(私は小説を書くのを職業にしてゐる者です、そしてはばお察しがつくでせうが、いまだに一人者です)、原稿と引きかへる事なしには、一文の金も私に立てかへてくれはしま

せん。その私を、この世の中で唯一人、この上なく信用してくれてゐる者があるのです。かういへばもうおわかりになりました。それが私の質屋なのです。

⑫ 私は、その時は、怒りのためにそつと入り口に近づいて、泥坊のやうに玄関の中をのぞきこんで見ました。さうでせう、妾でもかこつておかうといふ男が、妾の家に来るのに、何の毎日おなじ靴をはいて来るのですか。こらんない、靴の上には真白い埃がつもつてゐるのです。

⑬ いふもでもなく、そんな事までして、ひそかに惚れてゐた娘義太夫があつたのです。……(せんだつて、東京でその女がどこの寄席で真打を語つてゐるのをはからずも見まして、赤くなつたことがあります。名前ですか、もつと綺麗な女にでも惚れてゐたのならいひますが、いへません、いへません。)

⑭ もう一つお話することを許して下さいませうか、聞くに堪へない方は、もう私もしひてとは申しませんが、聞くに堪へない方は、耳をふさいで下さい。

⑮ だが、あるひは、それは、彼女が私にあの最後の言葉で気持ちをわるくしたからでせうか。それだとすると……私は、また、これから、毎日、この台所となりで、聞きなれた、磯節や、田植唄や、越後節になやまされねばならないのでせうか。皆さん。(おや、もう聞き手が一人もゐなくなりましたね。)

引用が長くなつてしまつたが、作品のごく初めの部分に当たる⑪において語り手は、聞き手との間に極めて密接な関係が築かれてゐることを想定しており、自分の言わんとすることは容易に察してもらえるはずだと、くどいくらいに念を押している。⑫は作品のほぼ三分の一が経過した箇所からの引用で、語り手はごく身近にいる聞き手に対するかのような口調で自分がふられた女の話を語つてゐる。⑬は三分の二余りが経過した箇所からの引用だが、ここでも語り手は、聞き手があたかも娘義太夫の名前を尋ねたかのような状況を想定し、それには応じられないという素振りを示すのである。

このように、総じて語り手は、聞き手の至近距離で語つてゐるという素振りを示し続けることで、聞き手をつなぎ止める努力をしているかのようである。しかし、再三に渡る逸脱的なへ語り」と、過去の女性との情痴話ばかりの物語内容とによって、⑭にあるように、作品の終わりの方、六分の五ほど経過した箇所では、一部の聞き手をつなぎ止めることを断念し始め、そして⑮の有名な結びの場面では、へおや、もう聞き手が一人もあなくなりましたね」と、その全てが自分から離れて行く状況に陥つてしまふのである。

一方で聞き手を身近につなぎ止めるべく、作品の初めから様々な働きかけを示しながら、物語行為のレベルではその非男性的な語りによって、物語内容のレベルではその遊蕩文学めいた情痴話の数々によって、終始聞き手のへ良識を挑発し続けた結果、最終的に全

ての聞き手を失つてしまふ「蔵の中」の語り手の姿は、一見極めて矛盾に満ちているように見える。しかし、この捻つた仕掛けの中にこそ、実は字野の批評性が隠されているのである。

(四) 作品に仕掛けられた批評性

そこで最後に、「蔵の中」という作品におけるへ話者とへ聞き手への関係を整理し直すことによって、この作品に仕掛けられた字野の批評性を明らかにしたい。

「蔵の中」には、それぞれ位相の異なる次の三つのへ話者―聞き手への関係が認められる。その第一の層は、物語世界のレベルにおけるもので、主人公・山路と質屋の主人の妹との関係である。主人公はこの出戻りのへヒステリイ美人へ向かつて、自分が過去に一緒に暮らしたヒステリイ女についてあれこれと語り、女は興味を持ってそれを聞いていた。続いて前項で確認した、語り手へ私」と作品内の聞き手という第二の層が指摘できる。第一層での主人公とへヒステリイ美人」とのやりとりを含めて、過去につき合った女性たちとの間の様々な経緯を、へ私」は聞き手に綿々と語つてきたのであった。そして最後に、作者と我々へ読者」という第三の層が、右の二つの層を包括する形で存在する。作品内の全ての聞き手が語り手の前から去るという結末をへ読者」が知りうるのは、まさにこの第三層においてである。「蔵の中」は、以上三つの層が入子状になつ

た構造を持つ作品なのである。

その三つの層の相互関係はどのようになってゐるのだろうか。第一の層で主人公は、へヒステリイ美人の気を引こうと様々な働きかけをしながら、へヒステリイは十分離縁の材料になるさうですね。」と、その女性の弱点を突く失言を犯したのために、彼女を失つてしまった。これは、語り手が聞き手の「良識」を挑発し続けた結果、全ての聞き手を失つてしまった第二の層と平行関係にある。このへ語りへに不快感を覚えてそれを聞くことを放棄する聞き手を、作者はへヒステリイの一言を聞いて顔色を変えたこの女性に擬しているのだと言える。

この第一層と第二層との間のパラレルな関係は、第三層にいる作者と我々へ読者へとの関係にも波及する。この作品を最後の一文まで読んだへ読者へが、作品内の聞き手に同調し、語り手の物語行為と物語内容を斥けたい衝動に駆られた場合、へ読者へは自らが囚われている人格主義的コードを凶らずも露呈してしまうことになる。全ての聞き手を失つた語り手を笑うへ読者へは、実はその生真面目な態度があたかも女性のヒステリイと同質のものだと、逆に作者から笑われるという仕組みになつてゐるのである。その意味で「蔵の中」の批評性は、人格主義的な読みの規範を持つ、個々のへ読者へに向けられてゐるのだ。

「蔵の中」における宇野浩二の批評性を、私は以上の点に認める

のであるが、それにしてもその批評性には、親友・広津和郎をして、

舟木重信君が「宇野浩二論」の中で、宇野君を鶴的だと云つたが、僕もそれには一寸賛成する。長年と云つても五六年だが、その五六年つきあつてゐる僕にも、宇野君の本体は未だに解らない。だから、最近のつきあひである重信君に、彼が鶴的と見えるのは、無理もないと思ふ。⁶⁵⁾

と言わしめた程の人の悪さが窺えることは確かである。だが、大正五、六年を境に文壇の覇権を握つた人格主義的言説が、こうした宇野の批評性によつて、僅かなりと言えども揺さぶりをかけ始められていたことは、注目に値する。宇野の投げたこの一石が、大正時代後期の様々な文学論争にどのような形で波及して行くのかという問題も興味深いのであるが、この点については今後の考察に委ねたい。

注

- (1) 山本芳明「大正六年—文壇のパラダイム・チェンジ」(学習院大学文学部研究年報)四一 平成七年三月、大野亮司「神話の生成—志賀直哉・大正五年前後—」(日本近代文学)第五一集 一九九五年五月。
- (2) 水上勉「解説」(宇野浩二「思ひ川/枯木のある風景/蔵の中」講談社文芸文庫 一九九六年九月)。

(3) 注1参照。

(4) 「読売新聞」大正五年八月六日、同八日。

(5) 小山内薫「所謂『遊蕩文学』に就て—吉井勇君へ—」(時事新報)大正五年八月十二日、十五、十七日、安成貞雄「遊蕩文学」撲滅不可能論

〔新潮〕大正五年九月、本間久雄「所謂遊蕩文学と現在の文壇」(中央公論)大正五年九月、近松秋江「遊蕩文学論者を笑ふ」(新公論)大正五年十月)等。

〔6〕赤木桁平「芸術資料としての遊蕩生活」(時事新報)九月八日(十三日)、「予の『遊蕩文学撲滅論』に対する諸家の批評に答ふ」(中央公論)十月。

〔7〕大正五年八月九日付け 松岡譲児宛書簡。

〔8〕菅野遊鳥「宮城野から」(文章世界)大正五年十月。

〔9〕例えば「文章世界」の「読者論壇」で言えば、大正五年十月号で小林はのかという人物が、へ桁平は大嫌ひな奴である。名を見たゞけで嘔吐を催してくる。(略)此奴の嫌ひな秋江氏は私の大好きな方であるのだ。』という意見を載せ、また同年十一月号では無記名の女性読者が、へ赤木桁平氏が読売新聞に「遊蕩文学の撲滅」と題して我が熱狂的崇拜せる長田幹彦氏近松秋江氏吉井勇氏外二氏に対して侮辱的名称のもとに撲滅云々の記事を公にせられたとの事で、実にく意外の感に打たれました。』という意見を寄せている。

〔10〕注8以外では、松崎えいたろ「秋夜独語」(文章世界)大正五年十一月、下島紫水「白き秋の夜に」(同)等。

〔11〕赤木桁平「漱石先生の追憶」(新小説)大正六年一月。

〔12〕島村抱月「将に二転機を画せんとす」(時事新報)大正六年一月二八日、三月一、三日。

〔13〕和辻哲郎「既に二転機、至れり」(時事新報)大正六年三月十、十三、十五日。

〔14〕注1の山本論文参照。

〔15〕森田草平「理想主義的自然主義」(文章世界)大正六年四月、江口渕「青年の夢」に対する批評」(星座)大正六年三月。

〔16〕和辻哲郎「偏頗と党派心―森田草平氏に」(文章世界)大正六年五月。

〔17〕若野泡鳴「近頃の創作界」(文章世界)大正六年七月、和辻哲郎「応酬」(文章世界)大正六年八月。

〔18〕南部修太郎は「志賀直哉氏の『和解』」(三田文学)大正六年十一月の中で、へ自己の作品に対する作家の態度が真摯であるならば、それは自ら作品の底に深い真実性を感じさせる。作品の中に描かれたる事実の価値、或は面白味、若しくは種々の技巧上に於けるその優越―勿論我々は作品の上に於て、かうした点を作品の本質として、見詰め味ふことを忘れないであらう。然し如何に事実心に心を惹かれ、如何に技巧に眼を魅されとも、我々は尚作家の人そのものから染み出てくる真実性を作品の底に感じる時に於て、最もそれに動かされ、最もそれを貴く思はされる。それは描かれたる事実し光を与へる。そして若しその作家に技巧の優越がありとしたならば、技巧は無技巧の技巧として生きてくるに違ひない。志賀氏の「和解」はこの意味に於て、貴き真実性を有する作品である。』と、「和解」の構図、描写、創作上の技巧に関する欠点を指摘しながらも、「和解」が読者を深く感動させる力と内容を持つ作品であると評価している。

〔19〕江口渕は「創作壇に活動せる人々」(新潮)大正六年十二月)において、へ私は「和解」の前に涙ぐんで思はず懽を正さざるを得なかつた。「和解」はたしかに近頃類を見ない位「まこと」に充ちた芸術である、真実に生きる人に依つてのみ生む事の出来る尊いほんとうの芸術である。芥川君が「和解」を評して「超文学の文学」と云つたのは、全く至言であると思ふ。実際私は近頃この位心の根柢から揺り動かされた作品を見た事はない。「和解」はたしかに大正六年に於ける文壇最高の傑作である。』と、最大級の賛辞を送っている。

〔20〕注1の山本論文参照。

〔21〕長田幹彦に関しては注1の大野論文を、正宗白鳥に関しては同じく山本論文を参照。なお、近松秋江に関しては、この時代に赤木桁平以外で近

松批判を展開したものを知らないが、本稿で取り上げた宇野の「近松秋江論」を読めば、当時彼が世間から等閑視されていた事実が窺える。

(22) 宇野浩「あとがき」(『蔵の中』改正文庫)。昭和十四年八月、改造社。

(23) 広津和郎「蔵の中」を読むー宇野浩二君の処女小説」(『時事新報』大正八年四月一日)。

(24) 菊池寛「四月の文壇」(『東京日日新聞』大正八年四月三日)。

(25) 田中純「創作列評二」(『読売新聞』大正八年四月三日)。

(26) 細田源吉「瞥した四月の作品」(『文章世界』大正八年五月)。

(27) 正宗白鳥「雜誌月評二」(『読売新聞』大正八年八月八日)。

(28) 宇野浩二「憚り乍ら批評家諸君！予が本年発表せる創作に就いて」三十九作家の感想」(『新潮』大正八年十一月)。

(29) 近松秋江「予を論じた宇野君の人物論」(『新潮』大正八年十一月)。

(30) 蓮實重彦「大正的一言説と批評」(『批評空間』第一号、一九九一年七月)。

(31) 注2に同じ。

(32) 岡本卓治「宇野浩二の出版ー『蔵の中』の(巧み)について」(川副国基編『文学・一九二〇年代』明治書院、昭和五十四年三月)。

(33) 先に触れた(私は)私はずごと朝下宿に帰つて来て、一枚一枚となくなつて行く著物を指をりかぞへました。そして、本当に机の上につぶして男泣きに泣きました。』という箇所が滑稽なのは、(男泣き)をする(私)の男性性が、著物を失つて泣くという、所謂「女々しさ」をまもつて戯画化されるからである。

(34) こうした男性的エクリチュールを具体的に体现するものとして、当時絶大な評価を獲得していた志賀直哉の小説文体を思い浮かべることができ。さらに言えば、注33で指摘した滑稽な(男泣き)は、『和解』に描かれた主人公やその父などの感動的な(男泣き)を、宇野が意図的に戯画へと反転させたものとして読むことも可能であろう。

(35) 例えば清水良典は、(一葉までの明治文学では、多くの女性作家が驚くほどの若さで輩出した)にも関わらず、言文一致という(国家を挙げての

文体改革が、女性を疎外した)ため、(一葉以後、職業作家と呼べる女性の出現は、田村俊子まで十五年も待たねばならなかった)事実を指摘し、(「言文一致」がもたらしたものは、文章にジェンダーが、それも男性のジェンダーが塗り付けられたということなのである)と論じている(『文学がどうした』、「毎日新聞社」一九九九年六月)。近代口語文体とジェンダーの問題を正面から取り上げるのはこの論の任には余るが、宇野の「蔵の中」は、男性作家の側から近代口語文体に「塗り付けられた」男性ジェンダーに揺さぶりをかけた、おそらく最初期の試みの一つだと考えるのではないか。

(36) 注4参照。

(37) 広津和郎「宇野浩二氏の印象ー人の好い古狐の感じ」(『新潮』大正九年一月)。

附記

本稿は平成十二年度広島大学国語国文学会秋季研究会(平成十二年十一月二十六日、於広島大学)における口頭発表に基づくものである。席上亦唆に富むご意見をいただいた方々に御礼申し上げる。

「蔵の中」の引用は『宇野浩二全集 第一巻』(中央公論社、昭和四十七年四月)に、「近松秋江論」の引用は「同 第十巻」(同、昭和四十八年一月)に拠つた。引用する際に、新字体のある旧漢字は新字体に改め、ルビは省いた。

—— たに・あきら、愛知大学短期大学部助教